

1) 新生児採血検体の收拾

新生児期にクレチン症を発見することが治療効果をあげる上で重要であることは言をまたない。また臍帯血中の甲状腺ホルモン殊にTSHの変動は極めて興味あることである。そこでわれわれは産婦人科医と協力し、新生児血、及び臍帯血をあつめる努力をした。臍帯血は国立国府台病院産婦人科病棟より、新生児血は千葉、東京、茨城等の各県の産科医より收拾した。検体数は、4月～1月の間に、臍帯血624一般検体33,348件である。これを入江教授に送付し、TSHの測定を依頼した。

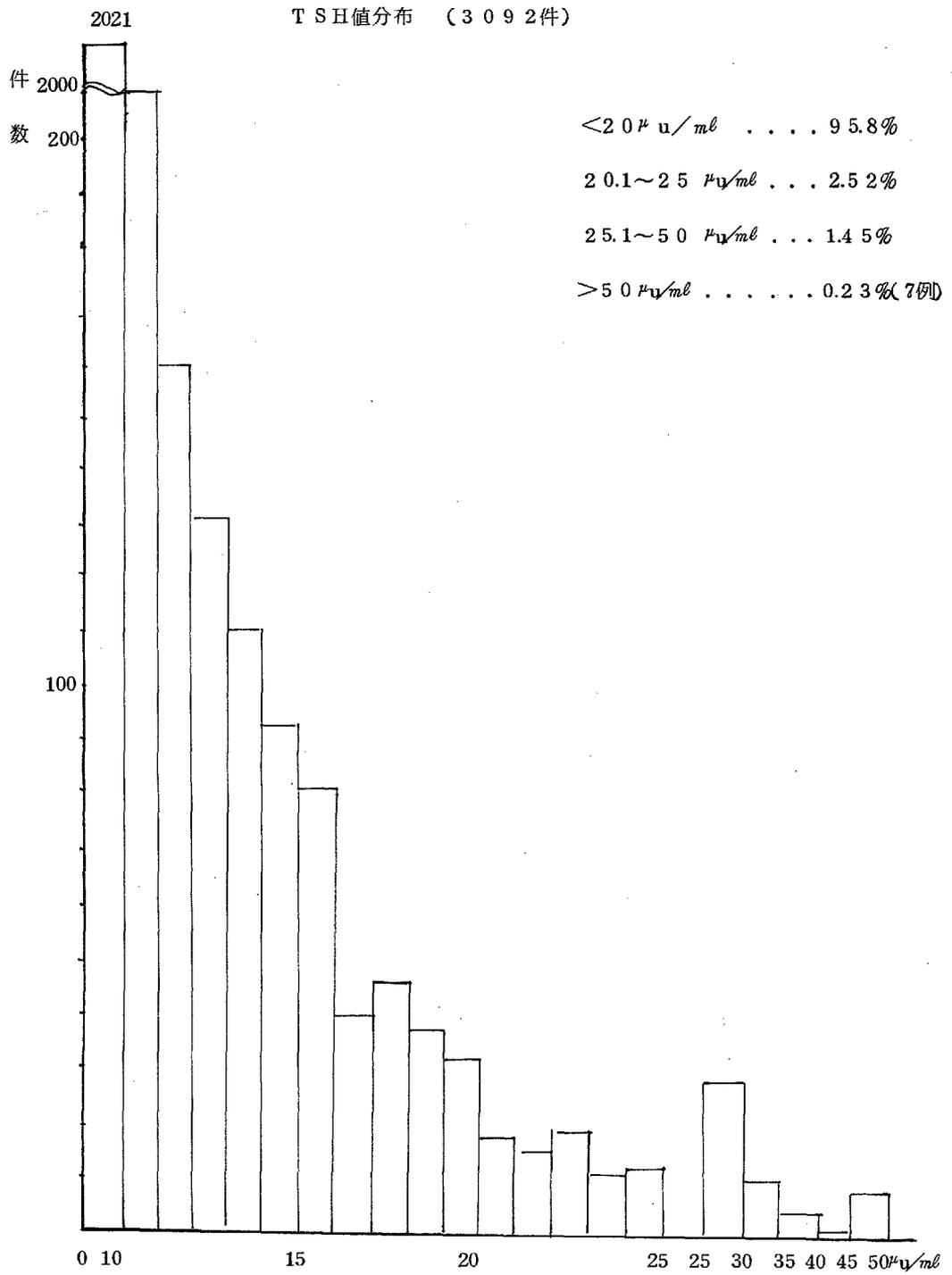
2) 新生児採血検体よりのTSHの測定

51年11月より、本研究所において、乾燥血液中より、TSHを測定するスクリーニングを開始した。方法は入江・榎本らの方法をそのまま採用した。濾紙上の血液スポットより1cmディスクを切りぬぎ、これを試験管に入れた。

その後マイクロメディック社製自動パイベットステーション、同社製自動ガンマーカウンターを用いて、TSHの測定を行っている。マススクリーニングの確立をめざし、1週2～3回、1回500検体を処理している。

まづわれわれの研究室におけるTSHの分布をみると、第1回の如くである。すなわち3092検体中、95.8%が $20\mu\text{u}/\text{ml}$ 以下となった。20～25のものが2.52%、25～50のものが1.45%、50以上のものが0.23%であった。そこでわれわれは、毎回の測定の中から、TSHの高い検体を15検体(3%)再検査を行った。上記の50以上のもの7件の中6件迄は第2回の測定では正常となったが、1例のみは、第1回 $64.5\mu\text{u}/\text{ml}$ 、第2回 $44\mu\text{u}/\text{ml}$ とその時の測定の中の最高値を示した。この検体は、血中チロジンも $8\text{mg}/\text{dl}$ 以上であり、肝機能の低下が考えられる。クレチン症の時にも黄疽遷延等の肝機能低下があるので、患者を疑い精密検査を続行している。2月25日現在、5,337件の検査を終了した。今後はわれわれの研究室においてTSHの測定を終了したものにつき、入江教授に依頼しT₄の測定を行いたいと考えている。

第1図 精研スクリーニングセンター



↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

1) 新生児採血検体の収拾

新生児期にクレチン症を発見することが治療効果をあげる上で重要であることは言をまたない。また臍帯血中の甲状腺ホルモン殊に TSH の変動は極めて興味あることである。そこでわれわれは産婦人科医と協力し、新生児血、及び臍帯血をあつめる努力をした。臍帯血は国立国府台病院産婦人科病棟より、新生児血は千葉、東京、茨城等の各県の産科医より収拾した。検体数は、4月～1月の間に、臍帯血 624 一般検体 33,348 件である。これを入江教授に送付し、TSH の測定を依頼した。